

編集室から

レギュラー陣の川畠さんも触れておられますが、都知事選挙が終わりました。能登半島という田舎に居を構え、地元集落から市議会議員を出していますから、土着のドブ板選挙については、嫌というほど味わっています。移住したばかりの頃、そのドブ板選挙の前近代性・集落が割れる醜さに、ショックを受け深く哀しい想いをしたことを忘れはしません。

一方で、ドブ板選挙とは真逆に在りそうな都知事選。果たしてこちらも、知名度だけに頼り上っ面の候補者像の押し出し・呆れる無政策の演説・前近代性溢れる選挙カーでの名前の連呼は、変わらぬスタイルだったようです。

政策立案や、その具体化を図るための施策の検討と遂行のお手伝いを本業の一つの柱としている身としては、地域経営者のトップである首長選挙で、明確なビジョンに根ざした構造的に意味のある政策体系をしっかりと表明できない候補者の姿は、誠に残念ながら「在り得ない」としか映りません。

それまでの紳士協定を破壊し、下ネタで政治家を追い落とす手法で一躍名を馳せた人物が、いつもは説明責任を追求する姿勢で人気を博し続けてきたにも関わらず、自らの疑惑に関しては何の説明もしないという、最も人間として恥ずかしい言行不一致（真逆）を堂々とやってのけたのには、恐れ入りました。

投票締切時刻早々に結果発表され、件の候補者にとってはダブルスコア差以上の完敗となり、最後にうなだれていた姿は哀れ以外の何者でもありません。そのような人生のラストシーンを自ら選択した自己責任は、ご自身にとっても決して軽くはないことでしょう。

それにしても、この国の民は、ほんとうに優しいですね。百万を超える支持（皮肉？）票が、それでも入るんですもの…。（は）



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆
していただいている川畠さん
が「能登の夜市」の姉妹店を
開店されました。

上京された際、ご利用になっ
てみてください。

もちろん、川畠さんご自身も
お店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00～24:00

金曜17:00～28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3

ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2016/08

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2016/08

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

景 月



能登・羽咋市神子原にて
by hama

**負けるな
熊本！大分！**

**被災地応援に
九州へ観光・旅行を！**

主の命を忠実に守ってさえいれば良かった封建時代。経済的に復興するという一方にのみ、全国民がひたすら前進していれば幸福がやってくると信じられていた。高度成長時代。過去の時代に比べ、価値観が多様化し、人々が感ずる「幸福」についても評価尺度が多方向を指している現代。地域の中でのさまざまな立場の方々の利害調整や、人々の間の折り合いのつけ方も、必然的に複雑化・高度化している。

地域社会の将来ビジョンを描きその実現を追及する政治や、それらの基ついで地域を経営・運営する執行部としての行政活動、地域経済の主要部を成しその活動如何によって長期的な居住人口の増減に影響を及ぼす経済活動、それらを包含しながら地域の特徴・文化性としてやがて花開いてゆく草の根の活動と、人々の日々の暮らし…。さらに、生業とする産業の違いでも、置かれた社会的立場の違いでも、新婚・出産・育児・就学・成人という家族構成のステージの違いでも、それぞれに利害は異なる。

このような社会から発せられる声は勢い、多方向に亘り、バラバラで収集が着け難い。

「調整をとる」ということは、多様な意見・考え方が存在することを前提としている。その中にはアンバランスな両極端なものも含まれているかもしれない。そのため、左右の両極がある事自体、悪とは考えない。大切なことは、両極が存在することを認め、それを前提に全体のバランスをとることである。

したがって、調整という役目に価値を置き、重視する社会では、立場や価値観を異にする相手を一方向的に責め、決して解決につながる事のない不毛な議論をする必要がない。極論が存在することは、逆にバランスをとるべき支点が何処に在るかが判りやすくなるから、むしろバランス点への収束を早める可能性が高まる。つまり、善い事とも考えられるからだ。

調整の現場では、関係者（ステイクホルダ）全員のメリットを引き出し・バランス点を推敲・模索していく…。一見、埋まらないと思われる者同士の溝を埋めるために何が必要なのか、想像力を逞しくする。バラバラな方向を向いている者同士に、歩み寄れる共通の方向性・バランス点を見出して提案し続けていく。

調整力と一言で言う能力の中には、どのような資質が必要なのだろうか…。

相手の意図をききだすコミュニケーション力（傾聴力+質問力）、深意を探る洞察力はもとより、なによりも立場を超えて利害の隙間を埋め、対立が持続することのリスクを洗出して伝え、新しい方向性を創造する想像力ではないかと思う。

一方、このような能力を備えてもなお、調整者の底流に脈々と流れる必要がある資質があるのではないか。

滅私奉公という古めかしいが、自分の価値観を優先しても始まらない世界が、調整である。

「人間は本来、より良い方向に向かうことができる」という信念・確信・希望があつてこそ、やり遂げられる

ことではないか。

そうでなければ、「なんでオレが?」となつてしまい、調整のために馳せ走り廻ることが馬鹿らしく感じてしまう。まして、目先の自分の利益を優先的に考えていては携わることには到底困難であろう。

この資質をなんと表せば良いのだろう。性善説、良心、ポジティブ思考…。少し大袈裟な言葉だと、慈悲・愛…か…。

難しい・一見合意形成ができなさそうな案件は

より深い本質性や願いを汲むことでしか調整できない。

「人の役に立つことで喜びを感じる」という人間だけに与えられた資質に対して、もっと敬意を払う必要があるはしまいか。

調整をおろそかに扱うと、時代趨勢の揺らぎによって変動するバランスが保てなくなりやすい。

社会がバランスを欠くならば、過剰と欠乏の両端を激しく往来を繰り返し始める。その結果、争い事が多くなったり、完璧主義の幻想に振り回されたり、逆に過度な平和ボケが進んで自滅の道を辿る。

おそらく、これまで人類が幾度となく繰り返してきた過ちの一つなのではないか。

社会状況のみならず、個人レベルにおいても、バランスを欠くと、意識の根底では自信の無い状態に置かれ続け、周囲からはそれが悪であるかの如く指摘されているように感じてしまう状態に陥りやすい。この状態の人々は、藁をも掴む思いで己の優位性や選民意識を獲得しようとする血眼になる。しかし、その状態では心底満たされはしないから、更なる不安と怖れを呼び起こし、スケープゴードを探し続け、イケニエとして吊し上げ続ける。それはまるで無間地獄に堕ちた餓鬼の様相で、哀れだ。

自信の無さを隠す必要はない。それは人間なら全員そうだから。隠そうとするから、余計な回り道をして、怖れ・恐怖の感情を抱いてしまう。素直に認めてしまえば、それらの感情もアツケラカンとなくなつてしまひ、何にもなくなつて楽になるのだが。

今、この社会の調整役としてのコーディネータの社会的価値・存在意義が忘れられてはしまいか。職種として認知されている訳でもなく、現場でのコーディネータは、直接それだけでは飯が喰えない。

地元、石川地域づくり協会にて、長く地域づくり活動のコーディネータを永く仰せつかつている。「活動の調整役」なのだが、関る活動の熟度や内容によって、調整が必要なる範囲・深度も多岐にわたっているため、専門領域の異なる二十数名のコーディネータが委嘱されている。この数は、全国でも群を抜いているが、中期的なビジョンとして県民一人一人のコーディネータを目指し、引き続き公募・活動内容の妥当性を検証した委嘱継続審査も実施されている。

県では、協会に対して予算措置を行うことで、喰えるほどではないが、きちんと謝金・旅費が支給されている点は、これからの先進事例となり得るだろう。

この現場を大切にし、これからも調整の要とその価値について、考え続けていきたい。

1960年代の将棋界に君臨した大山康晴15世名人は、かつてこう言った。「コンピュータに将棋なんか教えちゃいけないよ。ろくなことにならないから」

また、現役の第一人者である羽生善治三冠は、史上初の七冠独占を果たした1996年、“コンピュータが人間に勝つのはいつか”とのアンケートに“2015年”と答えていた。

果たして2013年3月、プロ棋士が初めて敗北、そのわずか3週間後の4月、プロのなかでもトップ棋士の一人がコンピュータを前に白旗を上げた。そして、将棋よりもコンピュータによる攻略が格段に難しいとされていた囲碁において、2016年3月、あっけなくその日が来たのである。

その約1ヶ月後の4月、囲碁界では以前に触れた井山裕太六冠が、残る一つのタイトルを獲得し、全七冠を独占した。日本の絶対王者は言う。「普通にやってみたい」

この言葉は、プロ棋士のコンピュータに対する見方が新たな局面に入ったことを暗示している。つまり“負けてはならないエイリアン”から、“興味深い好敵手、あるいは教わるべき先生”へと劇的に変わったのだ。そこで、少し時代を遡って、コンピュータがここへ至るまでの進化の過程を追ってみたい。

チェスでコンピュータが当時の世界王者カスパロフ氏に勝利したとき、DeepBlue¹がしたことは、ただひたすら多くの手を読むことだけだった。このゲームは、人類が強い指し方をプログラミングすることが可能だったのだ。

それが将棋になると、チェスと同様に計算力を駆使したアプローチでは、アマ五段までの強さが限界であった。プログラムは基本的に言語である。要するに将棋というゲームのすべてを記述することはできなかったのである。

森羅万象を言語化することはできない。それどころか目の前のアリ1匹の動きを完全に記述することさえままならない。ルールで縛られたゲームの世界においても、ラスベガスで繰り広げられるカジノゲームにて、必勝パターンを書き切ることができない。“2人が互いに情報を開示し、偶然が排除されかつ有
限的なゲーム²”にて初めて、人類が勝つ方法をプログラミングすること、すなわちゲームの完全な言語化が見えてくる。

その上で、チェスはだいたい記述できて、将棋はちょっと難しく、囲碁だとわけがわからないという感じであった。ところがその後、まずは将棋にて、次いで囲碁において、プログラミング上のブレークスルーが起こったのである。次号ではその具体的な方法に迫ってみたい。

注1:IBMが開発したチェス専用のスーパーコンピュータ。1996年にカスパロフ氏に勝利

注2:二人零和有限確定完全情報ゲーム

昨日の7月31日は東京都知事選の投開票日でした。結果は小泉純一郎ばりに、劇場型選挙を繰り広げた小池百合子氏の圧勝で幕をとじました。というか、これから都政の幕が開けます。メディアは、小池氏他、元岩手知事の増田氏、ジャーナリストの鳥越氏の三つ巴選挙として世論を盛り上げていましたが、実は候補者は過去最大の21人もいらっしゃったようです。自宅近くの選挙ポスター掲示板には恐らく10名くらいしか張られていなかった気がします。メディアからは完全に無視されてしまっていた18人の方はどのような心境、もっと言えばポスターさえも作らない(作れない?)にも関わらず、なぜ都知事選に立候補したのでしょうか?毎回オリンピックのごとく「参加することに意義がある」赤坂氏を除けば、他の17名のみなさんの“目的”が気になってしまう私なのです。

例えば、ジャーナリストの上杉隆氏は記者時代に自民党の政治とカネの問題や政権運営に対する批評など、わりと自民党とは距離を置いた骨のあるジャーナリストという印象でした。昨今の自民一強時代に対する提言もあり、立候補したのではないのでしょうか。また元自民党の所属で労働大臣にもついた山口敏夫氏の立候補には驚きました。政党を転々と渡り歩き、どこか重みのなさが印象の政治家でしたが、まさか今更都知事に?という感否めませんでした。元衆院議員を10期も務めた重鎮でありながらメディアでの取扱いもほとんどなく、これで自他ともに認める「政治家からの引退」になりそうです。

まあ知っている顔ぶれというとそのくらいでして、あとの16人に関しては、選挙後に気になって経歴を見ているくらいなのです。その経歴を見ると、あくまでも自分勝手な妄想ではありますが政策が見えてくるようです。

- ・映像配信会社社長 東京オリンピックに向けて世界に向けて東京を映像配信でPR?それを自社で?
- ・学習塾講師 OECDの統計で教育レベルの低下が問題視される日本の教育に喝?
- ・便利屋業 都政運営における民間への事業委託を推進することで減税を実現?
- ・医師 高齢者向け医療報酬の拡大で社会保障費の低減とともに、医者がもっと儲かる世界に?
- ・派遣社員 派遣社員の権利・立場の見直しと、ボーナス支給と最低賃金の引き上げで派遣の星に?
- ・陸上自衛隊員 沖ノ鳥島近辺での埋め立てによる領土およびEEZ拡大?

これらはあくまでも私の少し意地悪で勝手な妄想ですのであしからず。

というように今更になって他の16人の都政に対する考え方やコンセプト、具体的政策が気になるのです。そろそろ、日本における選挙のあり方も旧態依然とした、ポスター掲示~街頭演説~選挙カーでの騒音といった手法を見直し、24時間ぶっ通しの生討論会をネットおよび地上波で行い、自分のすべてをさらけ出したうえで国民の判断を仰いでほしいものです。

『富士の国から ~大魔神のたび~』ななつ星IN九州ファーストゲスト同窓会
2016.6.24 静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

拝啓 梅雨の候、昨日は「玉の湯」でみなさまにお会いすることができ、楽しい時間を一緒にさせていただきました。ありがとうございます。

「ななつ星」がまだ名前も決まっていない頃、どんな旅を体験していただきたいのかと考え、たどり着いたのが「新たな人生にめぐり逢う、旅。」というコンセプトです。皆様と旅の思い出を語り合いながら、みなさまに、そして私自身にもこの「ななつ星」を通じて様々なめぐり逢いがあったことを嬉しく感じました。

これからもお客さま、そして地域の皆様に愛される「ななつ星」をしっかりと育ててまいりたいと思います。

この先も末永く「ななつ星」の応援団でいてくださいましたら、幸甚です。感謝。 敬具

2016年6月26日 九州旅客鉄道株式会社 代表取締役会長 唐池恒二(直筆サイン)

二日前の6月24日に「ななつ星in九州」ファーストゲスト同窓会を由布院で開いた。それに対しての会長自ら感謝のお手紙に加え「ななつ星最中 方寸謹製」と「ななつ星の銀のスプーン」が贈られてきたのだ。

こちらが本来せずにはおられない気持ちいっぱい感動冷めやらない時のサプライズに、会長の著書「鉄客商売」に書かれている**「気」のエネルギーは、感動というエネルギーに変化する**を思わずにはおられない。

昨年12月17日にJR九州がホテルニューオータニで開催した「ななつ星in九州」の同窓会で、同じテーブルに座ったファーストゲスト面々が「我々、ななつ星の一番列車に乗り合わせた者で同窓会をやりたいね」と口にした。酔った勢いで「わかりました、私が幹事をやりましょう」と答えていた。頭の中には、博多駅のななつ星専用ラウンジ金星に集合、「ゆふいんの森号」に乗って由布院入りし、玉の湯で泊まるプランができていた。

同じテーブルにいた唐池JR九州会長が「であれば私も仲間に加えて」とのありがたい申出があった。

ところが、唐池会長の予定がなかなかつかない。ようやく決まった6月24日。当初GW明けにでもと思っていたが、その頃に決まっていたら開催できなかったのかもしれない。4月16日に震度6を記録した由布院を襲った地震の余韻覚めやらぬ時に、きっと皆から参加を躊躇する声が上がっただろうから。何人かの方からはどうされるかとの電話が入っていた。由布院の無事は電話で確認できていたから、予定通り開催することにした。

6月24日9:30に博多駅のななつ星専用ラウンジ金星に小生を含め10名が

集合した。後に由布院駅で2名合流し計12名の参集となった。

JR九州は、ラウンジぐらゐは特別に貸してくれるだろうなとは思っていた。それが、ラウンジ前には「ようこそ、お帰りなさい」と当時のクルーの面々が待っていてくれるのではないか。中に入っていくとピアノからは音が、ドリンクもスイーツのサービスもななつ星に乗るときに見たシーンが広がっている。思わず涙腺が崩壊しそうになった。

椅子には懐かし面々が、ななつ星のピンバッチを付けドレスコードがあるかの如くの姿でいた。げ、小生はブルーの半袖シャツ、これじゃまるで添乗員みたいだ。

ピンバッチも裏地に大島紬をあしらったななつ星特製吉田カバン製のショルダーバックも何も持ってきていない。ああ ななつ星の集まりがフツウの同窓会の集まりで、特別の場であることの意識が欠如していた。当時からさらに進化したスイーツそして発泡系のドリンクがななつ星の器に、そしてグラスに注がれ目の前に置かれる。水を注ぐと膨張するおしぼりは変わらず出てきた。

同窓会開会の挨拶、そして乾杯の音頭をお願いされ、皆の前に立った。この時に乾杯の発生はななつ星流と言われていた。それが何のことは忘却のかあなたにあった。我が小山町の商工会関係の集まりでは「完敗」ではなく「完売」ということになっている。挨拶で気分が舞い上がっているだけに、乾杯の言葉にまで気が回らずそのまま声を発したところ、ストップがかかった。写真撮影は「チーズ」ではなく「ナナツホシー」、乾杯は「セブンスターズ」なのだ。

気を取り直して、皆一斉に「7STARS」、シャンパンが喉を心地よく刺激し、五臓六腑に染み渡ってゆく。いよいよ我々の旅のスタートだ。ななつ星専用の通路には、な、なんとレッドカーペットまでが敷かれていた。敷きっぱなしではないのでこのため、わずか10名のために用意してくれたのだ。またまた目頭が熱くなる。待ち構えるはワインレッドの車体ではなくモスグリーンの「ゆふいんの森号」だ。ラウンジから車内まで運んでいただいたバッグにはななつ星のタグがさりげなく付けられていた。

車内に落ち着いた我々を待っていたのはクルーはじめJR社員の見送りだ。20人はいたであろう。ここまで、やってくれるのかと、大いに感動したが、それはまだまだほんの序の口であったことに後で気づかされることになる。(つづく)

